

『火ノ丸相撲』原作者 川田先生 ×

公益社団法人・東京青年会議所 副理事長

第34回わんぱく相撲全国大会実行委員長 諸田徳太郎

特別対談：「踏み出す勇気」～明日へつながる決意の1歩～



オリジナルビジュアルも完成

相撲漫画への挑戦

諸田徳太郎(以下諸田) 本日は貴重な機会を設けて頂きありがとうございます！私共は日本相撲協会と共に、毎年「わんぱく相撲」を主催しております東京青年会議所と申します是非、色々なお話を伺えたらと思います。本日はよろしくお願ひします。

川田先生 (以下川田) こちらこそ、よろしくお願ひします！

諸田 それでは早速始めたいと思います。本年度「わんぱく相撲」は「踏み出す勇気」～明日へつながる決意の1歩～をスローガンに掲げ、子ども達に勇気を持って挑戦していくことの大切さを学んでもらうことを第一に運営しております。川田先生は週刊少年ジャンプ(以下少年ジャンプ)で『火ノ丸相撲』を連載されておりますが、ご自身は相撲の経験はおありですか？

川田 いえ、実は未経験です。元々、格闘技は好きでしたが、相撲をちゃんと見始めたのは朝青龍関が活躍していた頃なので、成人してからですね。なので、相撲ファン歴もあまり長いわけではありません。

諸田 ですが、作品からは先生の相撲愛が溢れています！外国人力士の境遇などにも切

り込んでいますし、現在の相撲界に問題提起するような場面もありますよね。相撲ファンには是非読んでもらいたいと思っていました。

川田 そんな立派なことじゃないです！(笑)。ただ、現実としてある問題を避けて通ることはしたくないな、と。

諸田 相撲を漫画の題材にした理由とは何ですか？

川田 漫画家になってから相撲にはまったというのも大きかったですね。相撲漫画は数が少なく、まして少年ジャンプとなると非常にレア。でも僕は相撲が面白いと思ったので、それなら自分が相撲を面白く描けば、オリジナリティを出せるのでは？と。でもいざ少年ジャンプでやるとなると、超えるべきハードルは高いんです。作中でも描きましたが、相撲を知らない人の相撲のイメージは「太っている」とか、決してカッコいいとは言えないんです。

諸田 確かに少年誌の主人公はみんな大衆受けしやすい主人公が多いですねそんななか、「太っている」イメージの主人公を描かなければいけない。描いていて辛くなる時もあるのではないですか？

川田 そうですね。ですので、そういうイメージをどう覆すかが「火ノ丸相撲」を描くうえでの大きなテーマです。相撲は面白くてカッコイイ！！というのを表現しようと思って、刀や必殺技といったキャッチーな要素も入れています。相撲ファンとしては抵抗もありましたけど(笑)。

諸田 その一方で、小関君など、いかにも相撲取りといったキャラクターも登場していますね。

川田 編集者目線だと、もっとシュッとしたキャラクターのほうが人気を計算しやすいとは思いますが、そこは譲れませんでした。相撲のアイコン的なキャラクターが成長して、最終的に読者にカッコイイと思ってもらえたら「勝ち」かなと。実際に、小関が活躍した回は読者の反応も非常に良かったんですよ！！

諸田 私もファンの一人として愛読させて頂いているんですが、小関君が活躍すると胸が高鳴ります。本当にカッコいいですね。

少年ジャンプといえば過去に沢山の伝説的なスポーツ漫画が誕生してますよね。私も学生時代バスケットをしていて、そのきっかけとなったのは「SLAM DUNK」でした。今の子

ども達の中にも『火ノ丸相撲』を読んで相撲を始めたという読者もいるのではないですか？

川田 たまにそういう手紙もいただきます。それこそ「相撲ブームを起こすんだ！」くらいの気持ちでやってきたので、そういう手紙をいただくと嬉しいです。逆に今は「相撲ブーム」に引っ張られていますけど(笑)。相撲は勝敗がわかりやすいし、地面に円を描くだけですぐに始められます。だからもっとみんなに相撲をやってほしい。そういう意味でも、少年ジャンプで相撲漫画を連載したかったんです。それこそ『Dragon Ball』のかめはめ波のように、みんなが必殺技をマネしてくれるような漫画になればなと思ってます。

諸田 私も本気で撃てると思っていましたね！この前 VR で初めてかめはめ波を打てた時は感動しました(笑)。実際、相撲の道場に通う子供たちは、『火ノ丸相撲』に登場する必殺技をまねたりしているそうですよ。

川田 本当ですか！かっこいい必殺技を作った甲斐があります！

諸田 もしかしたら火ノ丸相撲の必殺技が今年の「わんぱく相撲」で見られるかもしれませんね。

川田 そうですね。僕も非常に楽しみです(笑)

諸田 さて話は変わりますが、火ノ丸相撲には主人公の火ノ丸君を始めとして、個性豊かで魅力的なキャラクターが多く登場します。その中でも特に重要な国宝達についてですが、火ノ丸たち国宝の二つ名を持つキャラクターは、どのように造っているのですか？やはり現実の国宝のイメージから？

川田 そこまで国宝ありきで性格を作ったわけではありません。刀剣マニアと言えるほどの知識もありませんし。でも後から考えると、沙田美月(三日月宗近)とか天王寺獅童(童子切)などは、多少刀のイメージに引っ張られたな、と思うこともありますね。

諸田 キャラクターと言えば現在連載中の大相撲編では絶対的横綱として刃皇が君臨しています。刃皇は横綱白鵬関に非常にイメージが近いと思っているのですが、現実の力士をモデルにキャラクターを作っているのですか？

川田 今の読者の多くが「強い横綱」と聞いて思い浮かべるイメージは白鵬関だと思いますから、結構重要なモチーフになっています。ですが、白鵬関ひとりがモデルというわけではなく、歴代の横綱の要素を少しずつ取り入れた集合体的な存在として描いています。

「わんぱく相撲」への想い

諸田　それでは「わんぱく相撲」の話も少々させていただきます。先生は「わんぱく相撲」をご覧になったことはありますか。

川田　作品を描くにあたって見始めました。

諸田　小学生とは思えない体格の子、ご両親ともども相撲に真剣に取り組んでいる子、相撲に出会ったばかりの子…。多士済々の参加者が両国国技館に集います。涙と感動の大会ですので、是非今年もご覧になってください！

川田　最近の「わんぱく相撲」に参加する子どもの数はどうですか？

諸田　数年前までは正直、右肩下がりでした。今の子どもには相撲以外の娯楽はいっぱいありますから。でもここ数年は相撲人気の高まりに比例するように参加人数が増えていくんです。相撲協会については様々な報道がなされましたが、ひとりでも多くの子どもに「わんぱく相撲」経験して成長の機会にしてほしいと思い、広報活動を行っています。

川田　カッコいい競技がいくらでもある中で、相撲を選ぶのは難しいかもしれませんね。

諸田　しかしながら「わんぱく相撲」は、相撲をやったことのない子ども達にも参加してもらおうという趣旨で開催しています。私も子供のころ、相撲の素人でしたが「わんぱく相撲」に参加して、運よく地区大会を勝ち抜き国技館で相撲を取らせて頂きました。親戚一同、非常に喜んでくれた記憶があります。国技館では残念ながら1回戦で敗退してしまいましたが、そのときの悔しさは今の自分の糧になっています。ですから、ひとりでも多くの子に相撲を経験してもらい、成長してもらいたいですね。勝利も敗北もすべて自分ひとりの責任になる相撲は、サッカーや野球とは異なる経験を獲得できると思って開催しておりますが、先生はどのようにお考えですか。

川田　高校相撲の取材で選手に相撲をはじめたきっかけを聞くと、「わんぱく相撲」で負けて、相撲にのめり込んだという子が非常に多いんです。だから、「わんぱく相撲」で負けることは子どもにとって、すごく重くて、意義のあることだと思います。

諸田　昨年、横綱稀勢の里関とも対談させて頂きましたが、やはり「わんぱく相撲」で

負けて、相撲の道に進んだとおっしゃっていました。いまの横綱に「わんぱく相撲」がなければ相撲の道に入らなかったとまで言わしめる「わんぱく相撲」は、人の人生を左右するほど意義のある事業なんだということを改めて思い知りました。

川田　　そういえば「わんぱく相撲」には、毎年ポスターにキャッチフレーズが掲げられていますね。

諸田　　はい。相撲を通して社会生活に必要な素地を身につける、というのは通年のテーマとしてあるのですが、それとは別に毎年キャッチフレーズを設けています。今年は『踏み出す勇氣』～明日へつながる決意の1歩～です。相撲の一步を踏み出すのはかなりの勇氣が必要だと感じております。ましてや「わんぱく相撲」に参加するのは小学生です。いつも大会を運営していて、身体の大い子とそうでない子の差がかなり大きいなと感じております。そう意味では火ノ丸君の相撲も通じるところがあるんじゃないかなと思っています。

川田　　僕ももっと早く相撲に出会っていたらなあ…。

諸田　　そんな中で今回、「わんぱく相撲」とのコラボ企画を聞いたときのお気持ちはいかがでしたか？

川田　　本当に嬉しかったです！大相撲の懸賞幕を出させて頂いたときもそうですが、現実の影響が出るとワクワクしますし、もっと色々なコラボをしていきたいですね。

諸田　　「わんぱく相撲」でも懸賞幕を募っていますので、是非！(笑)。「わんぱく相撲」の参加者には『火ノ丸相撲』を読んだことのない子どももいると思いますので、今回のコラボが『火ノ丸相撲』にとっても良い影響が出れば嬉しいです。

『火ノ丸相撲』の核心へ

諸田　　さて話をまた『火ノ丸相撲』に戻させていただきます。『火ノ丸相撲』と言えば魅力的なキャラクターが多いですが、先生は火ノ丸君をご自身の分身として描いているのですか？

川田　　意識していたわけではありませんが、後から考えると、僕も火ノ丸に自己投影していたんだなと思います。

諸田　とおっしゃると？

川田　火ノ丸が相撲向きの体格ではないのと同様、僕の作風や考え方が、あまり少年漫画向きではないんですよ。もともと青年誌で描いていましたし、少年ジャンプに最初に持ち込んだときも「ヤングジャンプの方が合ってるんじゃない？」と言われました(笑)。それでも火ノ丸が相撲に挑んだように少年ジャンプに挑戦し、賞に応募して結果を出し、担当編集もつけて頂いた。

諸田　少年ジャンプで相撲を連載することのハードルは高いんですね。

川田　連載すること自体もハードな挑戦でしたし、最初は読んでもらえないかもという不安も大きかった。10週打ち切りも考えられるので、1話1話、出し惜しみせずに描いていたら、思いがけず好評をいただき、現在まで連載することができました。

諸田　まさに「1番1番」ということですね！

川田　精一杯やれば後悔もないですよ。もし票が取れずに連載が終わっても、悔いはありませんでした。

諸田　「わんぱく相撲」は相撲をやっていない子たちが多く参加する大会ですので、身体の小さな子が大きな子と取り組むことがよくあります。そんな時でも子ども達は勇気を持って1歩踏み出して、挑戦しています。先生や火ノ丸君の「心」とすごく共通している部分がありますね。

諸田　ところで、火ノ丸君はお世辞にも相撲向きの体格とはいえません。なぜ主人公をそのような設定にしたのですか？

川田　小さい力士が大きい力士を倒す痛快さは相撲の醍醐味ですし、相撲を知らない人が見てもわかり易いです。読者が主人公の視線で体の大きい相手を見ると、威圧感が増えますよね。もうひとつ、小さい火ノ丸があれだけできるならと思ってもらえれば、相撲をやるハードルも下がるかなという狙いがありました。火ノ丸まで大きかったら「体の大きい人しかできない競技」と思われてしまう。アマチュア相撲だと細くても運動神経の良さで上位に残る子も多いですし、小さくても相撲に挑戦できるというのを伝えたかった。

諸田　大相撲でも小兵の宇良関とか応援したくなりますからね。火ノ丸が小さいからこそ、高い壁に挑む姿を応援したくなります！

川田 応援される主人公にしたかったというのは大きいです。

諸田 話は変わりますが、火ノ丸君は右腕を使えるのですか？いち読者として気になります。

川田 いま連載中の本編で、ちょうど核心に迫るところですのでお楽しみに…。今は意図的に少し暗い話にしている、火ノ丸も「こいつ応援していいの？」という面が出てきていますが、もうすぐ明るい話になるので、ご安心ください！

諸田 楽しみです！そういえば、大相撲編では恋愛ドラマが描かれていて驚きました。

川田 それも挑戦のひとつですね。本当は大相撲編自体、やるとは思ってなくて、大きな挑戦でした。高校スポーツ漫画でプロになってからも連載を続けている作品というのは非常に少ないです。未知のことにチャレンジするのなら、高校相撲編とは異なる要素も取り入れないと意味がないので、恋愛要素もその一環で取り組みましたが、おかげさまでそこそこ好評でした。

諸田 では次は「親方編」ですね！(笑)。個人的には「小学生編」も改めて漫画で読んでみたいです。火ノ丸君を語るうえで、小学生時代は欠かせないのでは？家族の、特に母の喜ぶ姿が観たくて、悔しさをばねに優勝できた。その気持ちが「踏み出す1歩」につながったのではと思います。

川田 火ノ丸と母との関係は、本編でも描いていくかもしれません。

諸田 取組の面では火ノ丸君は小兵の利点を生かす取り口の狩谷君と違う道を選びました。僕なんかは小さいなりの自分の利点を最大限に活用した戦い方をしようと考えてしまいがちですが・・・

川田 そこもギリギリまで悩みました。でも作品を通して「逆境との戦い」をテーマにしていたので、意地というか。今思うとそうだったのかもしれませんが。

諸田 ストーリーは最終回まで決めているのですか？

川田 もやっとしか決めていません。その都度編集さんと打ち合わせて決めていくことが多いです。細部まで決めると修正が効かなくなるので…。刃皇がインタビュー中に突然

泣いた回も、締切2日前に泣かそうと決めました(笑)。

諸田　　すごいギリギリだったんですね(笑)。漫画家さんのお仕事と言えば、すごいハードな印象がありますが、先生はどのようなスケジュールでお仕事をされているのですか？

川田　　昼夜関係なく、徹夜もざらです。水曜木曜は比較的凧というか、資料集めやカラーイラスト作成にあてています。そのあとネームに取り掛かって、OKが出たら作画に入ります。作画は平均で3日くらいですが、ネームがギリギリになったときは30時間くらいぶっ通しで作業して締切に間に合わせました。アシスタントさんにも感謝です。

諸田　　漫画家の仕事も意外とチームプレーが多いんですね！相撲も個人競技ですが、『火ノ丸相撲』ではチームの絆というのも強く描かれていました。

川田　　団体戦は大相撲にはないアマチュア相撲の魅力ですから、大太刀高校相撲部の友情なども描きたかったんです。それにある意味アマチュアって、プロよりも厳しくて。プロは負けても次がありますが、アマチュアは一度負けたら終了。しかも学生相撲の世界にいられる期間はすごく短い。

諸田　　3年間積み上げたものが、一瞬で終わることもありうる。

川田　　相撲は本当に残酷だと思うときもあります。全力を出し切れる保証すらないんですよ。緊張しているから、立ち合いもなかなか合わない。団体戦となると自分のミスがチームの敗北につながるから、余計に厳しいのが観ていて痛いほど伝わりました。

諸田　　火ノ丸君が國崎君と戦ったときに、相撲の「負け」の厳しさについて語ってましたね。厳しいからこそ、力士は絶対に斃れないように猛げいこをするんだと。

川田　　それも含めて相撲の面白さというか。一瞬に込められたキャラクターの人生を描けたらと常に思って取組を描いています。知らない人から見たら決着は早すぎてつまらなく見えても、そこに至るまでの紆余曲折を描けたら、きっと面白くなるんじゃないかと。

未来を担う国宝達へ

諸田　　本日は貴重な機会をいただきありがとうございます！私自身、常に全力で挑戦すること、負けをどう生かしていくか、そして仲間との絆などの大切さを、対談を通じて改めて感じさせて頂きました！最後に、「わんぱく相撲」に参加する子どもたちに熱いメッセージをお願いします！

川田　　まずは相撲をやってくれたことに感謝！精一杯やったらどんなことにも悔いは残らない、それは僕が『火ノ丸相撲』の連載を通して確信したことです。「わんぱく相撲」に参加すること自体が貴重な経験だから、全力でぶつかって楽しんでくれ！廻しのカッコよさは若い時はわからないかもしれないけど、何も身につけないでぶつかる君たちの姿は、本当にかっこいい！くれぐれもケガだけは気を付けて。そしてゆくゆくは大相撲を目指してくれたら、こんなに嬉しいことはありません。僕ももっと早く相撲に出会っていたらなあ…。